

[総合的な学習の時間]

**地域とのかかわり合いを通じた、自ら働きかける
コミュニケーション能力の育成**

- 6年「考えよう！わたしたちの弥彦村」の実践から -

小池 貴弘*

1 はじめに

(1) 課題設定の理由

① 児童の実態から

当校児童のよさは、素直で真面目、何事にも熱心に取り組むことである。準備や練習を繰り返し行うことで、発表会等では、大きな声で立派な発表をすることができる。全校の前での発表は原稿を見ないで行うことが伝統となっていて、始業式や終業式では、1年生から6年生までが、めあてや反省を原稿を見ずに述べている。児童もこのことを「よい伝統」と受け止め、自分が代表になった時には練習を重ね、自信をもって発表に臨む姿が見られる。

反面、物事に受け身であることが多く、学習に対しても、与えられた課題にはよく取り組むが、自ら課題を見出すことが苦手であったり、準備や練習をしていたことは立派にやり遂げるが、その場で考えて受け答えをすることが苦手であったりという一面がある。つまり、一方的な発信は得意であるが、相手とのやりとりや進んでコミュニケーションを図る力が不足していると考えられる。

そのような課題を解決すべく、当校では、総合的な学習の時間の最重点目標を、「表現力の向上を目指し、多様な視点や方法でものごとを表現できるような支援を工夫する。」と設定している。「表現力」といっても多様な表現方法があり、その目的や相手によって表現の仕方は千差万別である。ここでは、「表現力」をコミュニケーション力と同義に捉え、会話や体験を通して、自分の思いや主張、疑問などを言葉や行動で相手に伝えられることを目指した。そのためには、体験活動を中心に据えた活動を展開するとともに、たくさんの人々とかかわることができる活動を設定することが大切である。たくさんの人々と体験を共有し、会話を通じたコミュニケーションを重ねることで伝えたい思いが芽生え、児童自らが主体的にコミュニケーションを図ることができるようになることを願った。

② 弥彦村の現状から

市町村合併に伴って西蒲原郡唯一の村となった現在、地域の人々は、郷土に誇りをもち、郷土を愛する子どもの育成を強く願っている。行政も教育に熱心で、「心の教育推進委員会」や「弥彦村小中一貫教育プロジェクト」等を立ち上げ、小中ともに一村一校である利点を最大限に生かした教育活動を推進している。また、地域には弥彦神社をはじめとした、学習素材として価値の高い建物や場所・物・祭り等が豊富にあり、学校への協力体制も充実している。

このように、学習素材が豊富で協力体制も整っているという地域の恵まれた環境は、豊かな体験を通して表現力の向上を図りたいという教師の願いにぴったりである。また、そのような地域社会の中で暮らす児童自身も、弥彦村が大好きであり、事前アンケートの「弥彦村が好きですか？」という質問に肯定的な評価をした児童が、94%を示している。

「弥彦村を愛する心を育ててほしい。」という地域と、「人とかかわり合いの中でコミュニケーション能力を育成したい。」という教師と、「弥彦村が大好き。」という児童の心は、地域素材を活用した総合的な学習の時間を展開することで具現化され、より一層の成果を得ることができるのではないかと考えられる。

(2) 目指す子ども像

地域社会の一員として、地域の現状や問題点に気づき、よりよい郷土を創り出すための行動を考えたり、実行したりする活動を通して、自ら働きかけるコミュニケーション能力の育成を目指す。

* 弥彦村立弥彦小学校

2 研究の内容

(1) コミュニケーション能力の育成を目指した年間指導計画の改善

当校では総合的な学習の時間を「弥彦タイム」と称し、3年生で「地域・歴史」、4年生で「伝統・芸能」、5年生で「産業」、6年生で「福祉・ボランティア」と、地域に密着し、地域を教材とした学習活動を展開している。3～5年生で地域について多面的に学び、ふるさと弥彦村のよさ・特色・問題点等の多くの知識を身に付けたり、思いを膨らませたりし、6年生ではその思いを自発的な行動で表現しようというものである。

しかし、これまでの年間指導計画では、複数のねらいの異なった小単元が混在しているという問題点があった。これは、各教科との連携を重視し、教科の発展を総合に盛り込んでいたものや、行事に向けての準備等を総合と関連付けて計画したものなどである。その結果、活動が先に設定され、ねらいが後から付けられるような問題点が見られた。また、小単元が多いことから、年間を通して活動にどっぷりと浸ることができなかつたり、「情報収集（調べ学習・体験活動）→情報処理（まとめ）→情報発信（発表）」という小サイクルが繰り返されずに終わってしまい、活動に深まりを見せることが難しかったりという問題点もあった。

そこで、活動ありきの計画ではなく、目指す子ども像に近づくために必要な学習活動を組織した年間指導計画の改善と学習内容の精選を行うことにした。

(2) 地域との「かかわり」を重視した体験活動の設定


文部科学省は、総合的な学習の時間のねらいの一つとして、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。」と示しており、児童自らが進んで学習対象にかかわろうとする態度の重要性を述べている。また、当校の総合的な学習の時間の目標も、「地域のもの・こと・人に主体的にかかわり、追求・解決する活動を通して、地域のよさに気づき、よりよい郷土を創り出すために行動することができるようにする。」と設定し、もの・こと・人とのかかわりを、総合的な学習の時間の最も重要な要素と捉えている。特に、コミュニケーション能力の向上を目指した当校の取組においては、人とのかかわりは欠かせないものであり、長期的・継続的に地域の人々とかかわっていく活動を取り入れていきたい。地域の人々とのかかわりは見知らぬ人とのかかわりとは違い、児童にとって不安感や緊張感が軽減されるというメリットがあり、地域の共通の話題で話せるなど、コミュニケーションを図りやすくする効果も期待できる。

本実践では、地域の人々との長期的・継続的なかかわりを中心に据え、地域の人々と繰り返し接していく中で心のつながりを深め、「この人に伝えたい。」「このことを伝えたい。」という思いから生まれる、自発的なコミュニケーション能力の育成を期待する。

3 活動の実際

(1) コミュニケーション能力の育成を目指した年間指導計画の改善について

目指す子ども像の実現に向けて必要な学習活動を展開するために、下記のような学習活動の精選を行った。

<p>〈修正前〉</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 国際理解 (10 h) (2) 情報教育 (6 h) (3) 異学年交流 (10 h) (4) 体験活動 (64 h) ① 進め会津探検隊 (21 h) ② ボランティアって何だろう? (26 h) ③ 弥彦小ありがとう (17 h) (5) フリータイム (20 h) 		<p>〈修正後〉</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 国際理解 (10 h) (2) 情報教育 (10 h) → + 4 h ※ 異学年交流 (0 h) → 児童会活動へ (3) 体験活動 (90 h) → + 26 h ① ボランティアって何だろう? (12) ② チャレンジ! ボランティア (15) ③ チャレンジ! ボランティア 2 (20) ④ ふるさとを見つめよう (17) ⑤ ありがとう弥彦 (26) ※ フリータイム (0 h) → 配当なし
---	---	---

これまでの年間指導計画では、小単元が複数存在しているという問題点があった。そのため、季節や行事に追われて活動が進んだり、活動が深まりを見せる前に次の活動に移ってしまったりという実態が見られた。また、これまでは、

各小単元の終末に発表会等による活動のピークが設定されていることが多かったが、実際に児童の意識を考えると、個々の活動の成果を発表し合い、友達の活動や考えを知ることは、新しい疑問を生むよい刺激となっているのである。つまり、配当時間に余裕のある指導計画を立てることで、発表会後の児童の疑問や意欲を生かすことができ、更なる活動の深まりや広がりが期待できると考えられる。

このように学習活動の精選を行い、年間指導計画の修正に取り組んだ。一年間を通して「福祉・ボランティア」の視点で活動に取り組めるようになったことで、児童が試行錯誤を繰り返したり、相互に発表や意見交換をする時間を確保することができた。また、施設への訪問も、可能な限り複数回行うことができるようになった。

(2) 地域との「かかわり」を重視した体験活動の設定について

① 「かかわり」体験の設定

自ら働きかけるコミュニケーション能力を育成するために、地域のもの・こと・人とのかかわりを積極的に取り入れた学習活動の展開に取り組んだ。児童は、自信をもてる程の十分な知識や、「伝えたい。」という強い思いがないときには、消極的なコミュニケーションになってしまうことが多い。つまり、児童が主体的にコミュニケーションを図ろうとするためには、豊かな「かかわり」体験を基盤とした知識や思いが必要であると考えた。

月	学習活動	ものとのかかわり	こととのかかわり	人とのかかわり
4	オリエンテーション ○ イメージマップの作成 ○ 意見交換		○	○
5	ボランティアって何だろう？			
6	○ 社会福祉協議会の方から学ぼう！ ○ 車イス体験・高齢者疑似体験 ○ 意見交換	○	○	○
7	チャレンジ！ボランティア① ○ 夏休みボランティア大作戦の計画		○	○
8	夏休みボランティア大作戦 ○ 各自の計画の実行 ・一人暮らしのお年寄りへのプレゼント ・施設の訪問・清掃活動・アルミ缶集め	○	○	○
9	夏休み活動報告会			
10	○ 実践発表・意見交換 チャレンジ！ボランティア② ○ 特別養護老人ホームの訪問 ○ 情報交換会			○ ○ ○
11	ふるさとを見つめよう！			
12	○ 意見発表会			○
1	ありがとう弥彦			
2	○ 校舎清掃活動	○		
3	○ 感謝の会 ○ 寄付・寄贈活動	○	○	○ ○

② もの・こととの「かかわり」

学習テーマを「福祉・ボランティア」に設定したからといって、児童がすぐに学習に取り組めるものではなかった。なぜなら、児童にとって「福祉・ボランティア」とは、知っているようで知らないことが多かったからである。そこで、「福祉・ボランティア」という「こと」とのかかわりを深めることからスタートした。

まず最初に、イメージマップを作ってみることにした。児童が作成したイメージマップからは、「アルミ缶・プルタブ集め」、「植樹・栽培活動」、「募金」など、これまでに自分が目にしたことがある活動や、実際に前年度の6年生がやっていた活動が多く見られた。また、イメージマップを互いに見せ合い、意見交換をした後の感想カードには、「アルミ缶集めをして、何かを寄付したい。」、「学校や駅の清掃活動をしたい。」という感想が多数を占めていた。これらの活動が無意味なわけではないが、一年間継続して取り組む活動としては物足りない感じがあった。児童もそのことを感

じ、「どうしたらいいんだろう?」、「福祉・ボランティア活動って、どんなものがあるのかな?」という疑問をもつようになった。すると、「だれか、教えてくれる人はいないかな?」、「どこかで教えてくれないのかな?」という声が出てきた。

そこで、地域の社会福祉協議会の方をお招きし、福祉・ボランティアの心構えや、地域のボランティア活動の紹介などについてお話をしていただくことにした。お話の中での、「難しく考えなくていいんです。自分の趣味や特技を生かして、自分がやっていて楽しくて、相手も楽しめることが一番なんです。」という言葉が、児童の意識を大きく変化させることになった。これまでの児童の意識は、とりあえず自分にできることを一生懸命に探しているという段階であったため、清掃や収集活動など、今すぐにでも始められる活動にばかり目が向いていて、「だれのために」、「なんのために」という意識がぼやけていたのだった。また、弥彦村で実際に行われているボランティア活動を紹介していただき、お弁当配達サービスやおもちゃ作りなど、児童が思いもつかなかったような活動を知ったことで、児童の発想に広がりが見られた。「私はお菓子作りが好きだから、近所のお年寄りに食べてもらおうかな?」、「僕は、運動が好きだから、お年寄りと体を動かせるようなことができないかな?」、「私は裁縫が得意だから、小物を作って保育園に寄付しようかな?」というように、児童一人一人が自分だからこその活動を考えるようになるとともに、明確な相手意識をもった活動計画を立てることができるようになった。「福祉・ボランティア」という「こと」にかかわり、それについての知識を得たことが、自分から行動を起こそうという意欲につながった。

次に、車イス体験と高齢者疑似体験を行った。車イス体験では、実際に車イスに乗ってみたい、車イスを押してみたりしたこと、その不便さや配慮すべき点などに気付くことができた。児童の感想からは、「歩いていると何でもない段差でも、車イスで乗り越えるのはとても大変だったし、一人では越えられなかった。車イスを押していたら、色々なところの通路が狭くて、曲がったり、Uターンしたりするのが大変だった。こんなに狭かったことに今まで気が付かなかった。」という声が聞かれた。また、実際に体験したことで、問題点や自分のできることに気づき、「車イスを押す時には、急に動いたりスピードを出したりすると、乗っている人はすごく怖いことが分かったから、押す時にはゆっくり押したり、『動きますよ。』と声を掛けた方がいいと思った。あと、段差で困っている人がいたら、自分から声を掛けて、手伝うようにしたい。」と考えた児童もいた。

高齢者疑似体験では、疑似体験セットを着用して校内を歩き回ってみた。児童は、おもり付きのサポーターで膝の自由を制限したり、色付きのすりガラスの眼鏡をかけたりしたことで、思うように行動できない不自由さを体感した。特に児童が苦戦していた活動は、指を2本ずつテーピングで固定し、財布の中から小銭を取り出す作業だった。「お店のレジで、お年寄りの後ろは待たされることが多くて嫌だったけど、自分でやってみたら大変さが分かった。今度から、ゆっくり待とうと思った。」と感想を述べた児童がいたほどだった。また、「お年寄りにとって、階段はすごく大変。特に下りが怖かったから、階段でお年寄りに会ったら手を貸そうと思った。」と感想を述べた児童に、賛成の意見が多数寄せられた。

これらの「もの」を実際に使ってみたり、「こと」を自分自身で体験したりすることを通して、児童は、その人に合ったちょっとした心遣いや手助けがボランティアになり、それはだれにでもできることだと感じるようになってきた。そして、児童の意識は、「もの・こと」とのかかわりを通して、「人」とのかかわりへと移っていった。

③ 人との「かかわり」

児童は夏休みの課題として、ボランティア活動に取り組んだ。自分の興味や関心、趣味や特技を生かした様々な取組があったが、夏休み明けの活動報告会で児童の注目を集めたのは、人とかかわった取組であった。特別養護老人ホームや保育園を訪問したり、近所のお年寄りとおふれあったりした児童の感想には、必ずと言っていいほど、「楽しかった。」、「また行きたい。」という言葉が見られた。人とかかわってきた児童の充実感に溢れた活動発表を聞いたことで、清掃活動やアルミ缶の回収活動等を行った児童たちも興味を示し、2学期は全員で人とかかわる活動を中心に取組もうということになった。

そこで、校区内にある特別養護老人ホームとの交流活動に取り組んだ。施設への訪問活動には、人とのかかわりを体験できるだけでなく、これまでの車イス体験や高齢者疑似体験の経験を生かすことができることとともに、地域のお年寄りの思いを知ったり、お年寄りでも安心して暮らせる地域について考えたりできるという利点があった。それは、ふるさと弥彦村の未来を考えることにつながり、郷土を愛する心の育成に欠かせないものであると考える。

施設への訪問を行い、大きな変化が見られた児童がいた。K児は、明るく穏やかな性格で友達から慕われ、仲のよい友達や顔見知りの中であれば、のびのびと活動することができていた。しかし、知らない人の前ではもじもじしてしま

い、普段のよさを出せずにいることが多く、当校の課題となっている姿と一致した児童であった。

K児は、1回目の訪問では、練習通りのあいさつと自己紹介までは上手くできたが、その後の自由時間になると一歩も動くことができなかつたのである。友達とお年寄りがオセロをやっている隣に座ったままで、自分からは一言も話すことができなかつた。お年寄りや友達、施設の職員や教師に促されても、「はあ。」と曖昧な返答ばかりしていたのだった。K児は、お年寄りと交流するためにトランプを持って来ていたのだが、その日はずっとポケットに入れたままで帰って来てしまった。1回目の訪問を終えたK児の感想カードには、以下のような記述があった。

ぼくは、桜井の里へ行っただけで、何もすることができませんでした。ぼくは、お年寄りとトランプをしようと思っていたけど、最初は恥ずかしかつたので、友達がやっているのを見てから声を掛けようと思っていました。でも、隣のテーブルで、Cさんが「トランプやりませんか?」と言ったら、お年寄りが「目が悪いからできない。」と言っているのが聞こえました。ぼくは、トランプはダメだと思ったので、何をしたらいいかずっと考えていました。そうしたら、時間になってしまいました。お年寄りに楽しんでもらいたいと思っていたのに、逆に気を遣われたみたいで残念でした。次に行く時には、一緒に楽しく遊べるように準備をして行きたいです。

上記のように、K児が何もできなかったことには理由があつたのである。第三者から見ただけでは、K児にはかわらうという意識が感じられなかつたかもしれないが、K児の内面では、一生懸命にかかわらうと思いを巡らせていたのである。

そして、1回目の訪問を終えた意見交流で、K児は今後の活動へのたくさんのヒントを得ることができた。他のグループでは、お年寄りとおペアになったり、マークを口で教えたりしながらトランプを楽しんだという報告があつた。また、トランプができなかつたので、歌を歌って聞かせたり、世間話をしたりしていたという報告もあり、児童は意見交流を通して、お年寄りとの多様なかわり方を学ぶことができた。

2回目の訪問では、K児の行動に変化が見られた。K児のグループは、最初に楽器の演奏を行い、次に紙芝居を読み、場の空気が和んでから個人の活動に取り組んだ。こうしたことで、引っ込み思案のK児もすんなりと活動に移ることができるとともに、最初の楽器演奏と紙芝居を話題にして会話をすることもできた。この計画は、1回目の訪問後の意見交流を受け、グループのメンバー全員で考えたものだった。グループのメンバーは、前回の訪問でK児が思うように活動できなかったことを気に掛け、作戦を立て直していたのである。また、K児本人もお年寄りと会話をするために、「お年寄りは相撲が好きだから…」と相撲の話題を用意して訪問に臨んでいた。2回目の訪問を終えてのK児の訪問は以下のものであつた。

今日は、前回よりもお年寄りとおふれあうことができました。お年寄りには、目や手が不自由な方がいっぱいいることが分かつたので、今回はトランプはやめました。最初にリコーダーを吹いて、その後に紙芝居をしました。そして、僕は、お年寄りは相撲が好きだと思ったので、相撲の話をしました。だけど、僕が話しかけたおばあさんは、「相撲はよく分かん。」と言いました。でも、最初にやったりリコーダーと紙芝居の話をすることができました。「上手だったよ。」と言ってもらえたので嬉しかつたです。紙芝居でも、面白い所でお年寄りが笑ってくれたので、やってよかつたと思ひました。次に行く時も、紙芝居をしたり、話をしたりして、お年寄りの人たちにたくさん笑ってもらいたいです。

このように、K児は、お年寄りと接してみたが上手いかなかつた経験をもとに、クラスの友達と意見交流をしたり、グループのメンバーと計画を立てたりすることで、自分から積極的にコミュニケーションを取ることができるようになっていった。つまり、人とのかわりを通して、コミュニケーションの力を付けていったのである。

そして、訪問を重ねる中で、活動の最後にはお年寄りの生活について以下のような考えをもつようになった。

桜井の里へ行って見て、お年寄りも僕たちと同じように楽しいことが好きなんだと思ひました。でも、足が不自由で出歩けなかつたり、一人暮らしで話し相手がいなかつたりして楽しめません。ぼくは、そんなお年寄りでも楽しめるような弥彦村になったらいいと思ひました。村内の階段を減らしてスロープを設置すれば、お年寄りも遊びに出られると思うし、外でお年寄りに会ったら、ぼくたちにできる手助けをどんどんしていったらいいと思ひます。みんながそういう気持ちになれば、もっと住みやすい弥彦村になるし、みんなが弥彦村に住んでよかつたと思うのではないかと思ひます。

K児は、お年寄りとのかかわりを通して、お年寄りの生活に目を向け、その生活を向上させるために弥彦村の未来について考えを広げていった。そして、ふるさと弥彦村がもっと住みよくなって欲しいという願いから、自分たちにできることを実行しようという主体的な考えをもつようになった。

4 成果と課題

(1) 成果

① コミュニケーション能力の育成を目指した年間指導計画の改善について

年間指導計画の改善を行ったことで、体験活動に時間的な余裕が生まれた。それにより、施設を継続して訪問することが可能となり、児童とお年寄りとのかかわりが、より濃密なものとなった。昨年度までは、直接訪問する時間はなく、児童が作成した雑巾や手紙をプレゼントするというような交流活動であった。今年度の児童の中にも、昨年度の活動を模倣して、雑巾を寄付しようとした児童がいたのだが、施設を訪問した際に、逆に雑巾を頂いたことがあった。お年寄りにとって、裁縫をすることは手の運動になるのである。これまでの年間計画では、お年寄りと顔を合わせたり、話をしたりという活動が組まれていなかったため、お互いのことを知り合うほどの交流には発展させることができなかったのである。また、前述のK児のように、長期的・継続的に訪問活動を行うことにより、試行錯誤を繰り返したり、児童が対象としっかり向き合ったりする時間が保障され、児童が自己の内面と向き合い、考えを深めることが可能になった。年間計画を改善したことは、児童とお年寄りとの関係を深めたり、児童が活動に没頭できる時間を確保したりすることに、大変有効であった。

② 地域との「かかわり」を重視した体験活動の設定について

本実践では、「もの・こと・人」とのかかわりを重視してきた。見たり、聞いたり、体験したりという活動を通して、児童は多くのことに気づき、次の活動へと繋げることができるようになった。現地へ行く、本物に触れる、専門家に聞く、自分でやってみる等の活動は、何にも代え難い貴重な体験であり、児童はその体験から教師の期待以上の発見をすることができた。特に、地域の「人」とのかかわりは児童に返ってくるものが多く、言葉であったり、相手の笑顔であったりと、次の活動への意欲となるものをたくさんもらうことができた。

また、「もの・こと」とのかかわりから始まり、「人」とのかかわりへと発展していくことは、児童の思考の流れも自然であり、よい展開であったと感じている。「もの・こと」から自分で感じたことや学びんだことを「人」に伝え、「人」とのやりとりの中で、自分だけでは知ることができないヒントをもらうことができた。これらの点から、「かかわり」を重視した体験活動は、児童が自ら働きかけるコミュニケーション能力の向上に有効であったと考えられる。

(2) 今後の課題

年間計画の修正と「かかわり」を重視した実践を通して、児童のコミュニケーション能力の向上に成果が見られたが、反省点も挙げられる。それは、訪問先との連携である。お年寄りは児童をとっても可愛がり、たとえ活動が上手くいなくても、訪問してくれるだけでとても喜んでいただいた。また、施設職員の方々も非常に協力的で、上手くかかわれない児童の手助けをしてくれたことも多々あった。しかし、児童にとっては失敗もよい経験であり、失敗から学ぶことも多いのである。時として、お年寄りの厚意や職員の方々の手助けが、成長のチャンスを奪ってしまっていたという事実も否めない。相手があってこそそのコミュニケーションだけに、訪問先との連絡を密にし、双方のねらいについての共通理解を確実にしながら、互いにメリットの多い活動になるように実践を積み重ねていきたい。

5 参考文献

- 渡邊興勝 「確かなふるさと観の育成を目指した地域素材の教材化—第6学年『ヒスイと奴奈川姫の旅』の実践を通して—」『教育実践研究第16集』上越教育大学学校教育総合研究センター 2006
- 小島 誠 「地域を大切にできる心情を育てる総合的な学習の時間の一考察—『かせぐ』をキーワードにした3年「I LOVE塩沢」の実践から—」『教育実践研究第18集』上越教育大学教育総合研究センター 2008
- 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」 2008年8月